

江戸・明治期における「吉原細見」の基礎的研究

著者：倉金宙本(中央大学大学院文学研究科)^A

A Basic Research of "Yoshiwara Saiken" in the Edo and Meiji Periods

Author: Hironari Kurakane (Chuo Graduate School of Letters)

要旨

本稿は、吉原遊廓を研究するに際して、その基礎史料となる「吉原細見」について大きく二つの問題について取り上げた。その問題を扱う前提として、細見の定義について第一章で考察をした。筆者は、先行研究では研究者によって種々の説明がされてきたものをまとめ、歴史学のみならず、他分野の研究も参照しながら新たな定義を規定した。

本稿で取り上げた二つの問題とは、一つは「読み方の問題」Ⅱ史料学的問題である。細見の定義とも被るが、遊女評判記との差異をいかに扱うか、当代史料を用いて、当代人にとつての細見が何であったのかについて第二章で考察した。その結果、先行研究において評判記と連続的なものと考えられていた細見は、両者に相関関係はありながらも連続的なものであるとの考えに疑義を呈した。もう一つの問題は、事実性をめぐる問題である。細見は、既存の研究においてその正確性の議論をしないまま扱われてきた。細見は、実用性に長けていることから正確性を疑ってこなかったが、宮本由紀子が指摘している通り、明治期にはコピー品が存在する。それが江戸期細見においてはどうであったのかについて山東京伝の黄表紙を基に第三章で考察を行った。

^A Corresponding Author: E-mail: a18.mjek@chuo-u.ac.jp

Abstract

This paper deals with two major issues concerning Yoshiwara Saiken, the basic historical source for research on Yoshiwara brothels. As a precondition for dealing with these issues, the definition of Saiken is discussed in Chapter 1. The author summarized the various explanations given by researchers in previous studies and defined a new definition, referring not only to historiography but also to studies in other fields.

The two problems addressed in this paper are “problems of interpretation,” in short, archival problems. In Chapter 2, we discuss how to deal with the difference between Saiken and Yujo Hyoban-ki, and what Saiken was to the people of the day, using contemporary historical sources. As a result, we questioned the idea that Saiken was considered continuous with Yujo Hyoban-ki in previous studies, although there is a correlation between the two. Another issue is that of factuality. Saiken has been treated without discussing its accuracy in existing studies. The accuracy of Saiken has not been questioned because of its practicality, but as Yukiko Miyamoto has pointed out, copies existed in the Meiji period. How this was the case in Saiken during the Edo period is discussed in Chapter 3, based on Kyoden Santo’s yellow cover.

キーワード：吉原遊廓、吉原細見、遊女評判記、評判記

Key words: Brothel in Yoshiwara, Yoshiwara Saiken, Yujo Hyoban-ki, Hyoban-ki

目次

はじめに―「吉原細見」研究の視角と課題―	3
第一章 細見の定義	6
第二章 細見の解釈―評判記との差異から―	11
第三章 細見からみえる遊女とその存在事実	13
おわりに	18
参考文献	20

はじめに―「吉原細見」研究の視角と課題―

本稿は、「吉原細見」（以下、細見）についてその定義の再検討、および細見にかかわる事実性をめぐる問題と、読み方をめぐる問題、という二つの問題について考察をするものである。

細見の研究は、吉原の研究もそうだが、歴史学のみで行われている（きた）わけではない。しかし、歴史学は他分野における細見研究の成果をほぼ無視してきたと言って良い。近年の、他分野、特に国文学の研究成果も取り入れながら先行研究整理を果たしたのが、高木まどかである¹。

細見・遊女評判記（以下、評判記）の研究は、歴史学ではわずかに留まる。高木まどかはそのわずかの一人ではあるが、高木以前は一九九

○年代まで遡る必要がある²⁾。特に細見に限れば、一九八〇年代が歴史学では最新であった³⁾。ここでは、高木が評判記についての詳細な先行研究整理を果たしたので、細見に限った先行研究について取り扱う。

前述の如く、細見の歴史学における成果は前述であげた二つしかないと言って良い。特に、一九七〇年代における細見研究は書式変遷、それがもたらしたと思われる意味、細見からいかに吉原を読み解くかという点において今なお、指針を示すものとして大変有用である。

一方で、細見研究の難しさも露呈した。それは、細見が歴史学にもたらす意味性の少なさである。つまり、例えば、寛政九(一七九七)年に細見は、揚げ代金が金銀混合から金に統一され、太夫、格子が消え、「よびだし新造付き」という名称と合印⁴⁾が誕生し、合印を入山形の変形に統一し、階層の上下で対応させた⁵⁾が、それが何を当時の社会に対して意味したのか不明であり、その前後の歴史的過程も不明であり、ただ変化した、という結果のみがついてきて、歴史学の現在の潮流である実証主義歴史学に相容れなく、遅塚忠躬に代表される科学としての歴史学研究⁶⁾を標榜するものとも相容れないものでもある。しかし、これが、研究として成立し得るのは吉原の事実性をもっとも正確に⁷⁾、表した史料が細見だからである。これに勝る歴史資料が存在しないからである。

先行研究に話を戻せば、国文学において花咲一男が近世風俗研究会から細見の復刻四種を一九七六〜八二年にかけて刊行した。また、丹羽謙治や八木敬一らが細見について宮本と同じ手法で分析をした⁸⁾。それをまとめた『吉原細見年表』は、まさに細見の書式変遷分析の集大成と言えよう。細見の研究はこのように、書式変遷の分析にほとんどを費やされ、丹羽は年表とほぼ時を同じくして「天理図書館蔵遊女評判記・細見目録稿」上下(『ビブリア』一〇六、一〇九号(一九九六、一九九八))を著した。一九七〇〜九〇年代に国文学、歴史学ともに細見研究を行っている理由、それ以降急速に衰退した理由は定かではないが、双方ともにそれぞれの成果を扱っていない。

この九〇年代後半は、細見そのものではなく、別の研究において細見が分析され始めた時代でもあった。それに代表されるのが鈴木俊幸による一連の葛屋重三郎研究である。⁹ 葛屋重三郎という、一時期細見の独占販売を担った人物において、細見はいかなるものであったのかという考察がなされたほぼ唯一の研究である。

このように九〇年代後半から、細見はかつて書式変遷のみではあったが、研究の主題として活躍していたことを忘れたかの如く、研究の補助史料に移り変わっていった。丹羽の「細見は実用的なものであるだけに、遊女や妓楼の実態を反映しており、有力な補助史料となりうるのである」¹⁰という一文はまさにその意識を表している。また、歴史学でも近年の横山百合子による嘉永二年梅本屋佐吉抱え遊女付け火一件の一連の研究でも細見は使われているが、細見は京町に梅本屋がいて、そこに名前がある遊女が放火犯の名前と一致するかという確認で使用されてきた。

しかし、ここでのなよりの問題は、細見の事実性が明治期以降に担保されていたのかという問題(事実性をめぐる問題)と、細見をどう解釈するかという史料学的問題(読み方(史料学的解釈)をめぐる問題)である。細見とは、もはや何の問題意識なく、吉原のガイドブックや案内図、あるいは宣伝書という微妙に異なった定義が、何の裏付けもなくされる。江戸期の細見と明治期以降(特に、明治一〇年代(一八七〇年代後半)以降)の細見の事実性の問題はいささか深刻に捉えるべきである。

本稿は、第一章でこれまで曖昧であった細見の再定義を行い、第二章で細見の定義を受けつつ、評判記との差異性に着目しながら読み方の問題にアプローチする。第三章にて、黄表紙などを使用しつつ、遊女の実在事実を細見が担保できていたのか確認する。

第一章 細見の定義

細見とはいかなるものであったのか。その定義されるところが、実は決まっていなかった。定義する必要性は、まことに勝手な説明が氾濫しているからである。江戸語¹¹について大きな業績を残した前田勇は、『江戸語の辞典』¹²の「細見」の項で

『吉原細見』の略。娼家名・芸娼妓名およびその位付・揚代等を一覧表にした案内記。享保年間に始まり、「五葉松」と題して毎年改正ごようのまつ板行された。(後略)

と、説明した。注目すべき箇所がいくつかあるが、まず「吉原細見」ではなく「細見」として収録されていることは、江戸語としては逐一呼ばず、細見が一般的呼称であったことが窺える。次に、享保年間に始まったという説明は、歴史学における主要な見解と大きく異なる。歴史学における細見の最も人口に膾炙した定義を宮本由紀子の論考¹³より見てみると、

遊女や遊女屋の格を示す合印(あいじるし)、遊興費の目安になる揚代金が記載された江戸吉原の遊里案内書。近世中期から出版され昭和三十年(一九五五)代に吉原が廃業するまで続いた。初見は寛永十九年(一六四二)の『あづま物語』といわれ、「遊女評判記」に各遊女屋に抱えられた遊女たちの源氏名を記載した「細見記」を付録したもの。元禄期以降「細見記」の部分のみが独立し、文学的傾向の強い「評判記」に対し人別帳の形式で案内書の機能に重点を置いたものになった。ただし当初は一枚摺りの地図(絵入大尽図)、元

禄二年（一六八九）で縦七九センチ、横八九センチの大形で享保十年（一七二五）代まで続く。たびたび見るには不便なため享保十二年に縦一三センチ、横一九センチの横本ができ三十五年間続くが、安永四年（一七七五）に蔦屋重三郎により縦本（縦一五センチ、横一〇センチ前後）に、またそれまで個々に付けられた題名を「吉原細見」と統一して蔦屋の独占販売体制になり以降定着した。

と、説明される。細見の開始年代やそもそもの説明が著しく離れていることがわかる。先に、『国史大辞典』の誤りを正しておけば、元禄二年の細見を「絵入大尽図」としているが、正しくは「絵入大図絵」である。

その他細見の説明としては、赤坂治績は

吉原の遊女屋は二種類の宣伝書（遊女評判記と吉原細見）を発行していた。（中略）享保末期（一七三六年）以降、遊女の名前だけ載せた吉原細見に移行する。遊女の数が多くなり過ぎて、名前しか掲載できなくなったのである。¹⁴

と、いう持論を展開した。また、石井良助は

（前略）細見は古くは遊女の評判記のごときものであり、のちには、遊女屋の名、遊女の名と等級、揚代などを記した吉原一覧ふうの案内書となったもので、享保ごろから盛んに刊行された。¹⁵¹⁶

と、した。石井の説明で注目すべきは吉原の案内記、宣伝書としていた他と違い、吉原一覽ふう、としたことである。石井の狙いが何であつたのかわからないが、この「ふう」という説明は極めて正しい。細見に収められた吉原は、吉原の全体ではない。それは、吉原町名主が鷹狩場も支配していたからである。つまり、「吉原町名主」の名のもとで管理されていたわけだから、そこを「吉原」に含めるのが自然である。

さて、筆者の細見の定義を先に提示した後に、その理由を述べよう。筆者は細見を以下の通りに定義する。

江戸期においては本当の名も、死後の戒名もわからず、ただ吉原に生きた証を残した遊女たちの過去帳である。その初見は享保期における横本細見の出現にある。遊女の名、遊女屋の名、茶屋などが地図と共に一体として描かれた。宣伝書の意味合いを伴う細見は、鳶屋細見のみである。細見の出版は、大きくは、鱗形屋、鳶屋、玉屋がその順で江戸期細見を独占的に発行した。横本細見以前の、一枚摺り時代を、細見への足掛かりとして捉え、「初発的細見」とする(いう)。ただし、初発的細見は評判記から独立したものではない。明治期以降、特に明治五(一八七二)年になんらかの理由¹⁷で玉屋が細見を発行しなくなってからは大きな板元が存在せず、細見は混乱を極めた。明治一〇年代より源氏名の横に本名が記され始め、廓の女に終わらず、社会的に通用する女を遊客は買うことになった。

ここにおいて、享保期を初見としたのは細見には以下の要素が必要であると考えたからである。それは、前田が説明したような源氏名・遊女屋名およびその位付・揚代等を一覧表にした案内記という要素である。横本以降の細見と初発的細見では形式があまりに異なり、もはやその読者の目的も変わりはてるため、位付・揚代が必要である。

なお、初発的細見、例えば万治元（一六五八）年の「芳原細見圖」は、女郎数二八六八人に対し、太夫・格子・局・散茶・次女郎の全ての人数を足すと二二〇八人で六六〇人の遊女が足りないのである。太夫が三人であり、たしかに京町三浦屋（四郎左衛門内）に三人の太夫がいて、他にはいないことから史料上の数字は、吉原の中の遊女数をカウントしたものだとは判別できる。つまり、ここに書かれなかった遊女が六〇〇人以上存在することになる。いわば、不完全な細見である。この不足数については、禿や新造の可能性も残されており、直ちにこれが細見の事実性を疑うものとはいえないことはことわっておく。

ここで赤坂、石井、宮本の説明を思い起こしてみる。この三者は、評判記から細見に移行したという点で同じである。

宮本は、評判記から「細見記」が独立したのを元禄期以降としているが、これは検討の余地を残す。『吉原丸鑑』という評判記は「惣評論」で「さん茶むめ茶の内にして、三浦山口の太夫の名に同じき名を名のりたまふかたぐをば、ことごとくその名を此書にあぐる事なし」¹⁸とあるように、完全ではないものの、ほとんどの遊女を採録していることが窺える。また、評判記でありながら、惣女郎は名前を集めただけの、まさに「細見記」の役をしている。つまり、評判記と細見に宮本の言うような評判記のある部分（「名寄せの部」）が独立↓細見という完全なる連続性は、見出すことが現状できない。また、『吉原鑑』¹⁹を見ると、まず細見の如き地図と遊女屋、遊女が並んでいる。そしていくつかの遊女評判が並んでいる。まず初めに細見部分が来ており、位の高くない遊女もやはり採録しているところに、宮本の巻末の「名寄せの部」が独立して、細見になったとの説明は一般化できうるものではない。『吉原鑑』は万治二年のものであり、前年に細見がでていたため、評判記から独立よりはむしろ、互いに独立しあっているものと捉えられる。そのなかで、評判記が細見にあたる部分を後に削除したと推察される。赤坂のものは、評判記と細見が書き手も異なれば、機能するものも違うという事実を無視したものである。石井はこの移行に関す

る説明を行っていない。

評判記と細見の対比について、宮本は評判記を、所見のある遊女と馴染みの遊客以外は知る由がなく、雲の上の存在として吉原を紹介していたが、細見によって「遊客は大門をくぐって、右も左もわからずとも、あたかも馴染みの如く吉原の中を自由に見物することができた²⁰」という。しかし、元禄期に「通」と「野暮」がそこまで意識されたのかというところに問題がある。宮本の記述は、要するに、細見を通じて吉原の通のフリをして、吉原を歩くことができたという。その時期に吉原をよく知っている、いわゆる通が意識されていたのかを解明することが細見の読者層とその目的を解明するのにつながる。その他、宮本は出版統制の動きが評判記から細見の独立を促したという。貞享元（一六八三年）、元禄七（一六九三年）の出版統制の事例を挙げ、これらが独立を促したとの指摘である²¹。しかし、評判記はその後も出版されており、細見の独立化への影響について過大な評価と思われる。つまるところ、細見と評判記にはある程度の相関係数は存在するが、因果関係は見出せない。

また、評判記の範囲そのものに課題がある。高木が指摘したように²²、「遊女評判記」という語は近世において存在せず、どの範囲を遊女評判記とするかについて、研究者によって様々であった。高木は、一般に評判記の終わりとされる宝暦五（一七五五）年までの評判記の数として、細見類を含める姿勢を見せているが、やはり分けて考えるべきである。次章で評判記との差異について詳述する。

細見は横本時代と縦本時代に大きく分かれる。前者を前期細見時代、後者を後期細見時代として区分する。さらに後期細見は、蔦屋が刊行した江戸期としては異質の時代があり、蔦屋時代の細見を後期細見Ⅰ時代と呼ぶことにする。玉屋山三郎による細見を後期細見Ⅱ時代と呼び、玉屋細見のあとを後期細見Ⅲ時代と呼ぶことにしよう。次章で、評判記との差異をはかりながら細見が当代にいかなるものであった

のかを明らかにする。

第二章 細見の解釈―評判記との差異から―

本章では、「はじめに」で記した「読み方の問題」について扱う。

まず、史料学的問題の前に横本細見についてその読解としての「読み方」に触れよう。

横本細見は、宮本の論考においては享保一二(一七二七)年に伊勢屋板が初見としている²³。横本細見について、持ち歩くのには便利になったが、地図の機能はかえって薄らぎ、初心者には見悪い²⁴、とした。たしかに横本細見は、筆者が見ても一枚摺りを広げて見るより見やすいが、どこに遊女屋があるのかわかりにくい。当時も同じ人間が見ていたので、共通の感想はあったかもしれない。しかし、例えば明和五(一七六八)年春の「美名の川」²⁵を見ると、「江戸町老丁目中ノ町右かわ」とあるように、大門を入り、江戸町一丁目の右側の遊女屋が羅列してあることは容易にわかる。江戸町や京町といった町の場所は、遊女屋一覧に行く前に記されている。つまり、ある一頁を見れば地図の機能が薄いだと評価できるが、細見全体として見れば、薄らいでおらず、むしろ持ち運びの点や広げた際の大きさを鑑みれば、初心者にもそれ以外にも向いた細見と評価できるのではないか。

さて、前章の定義と被る議論もあるが、細見のもっとも問題は評判記との混同である。国立国会図書館は、細見の史料を「評判記」と件名に表記していることが、その最右翼である。国立国会図書館の件名表記は、目録を検索する際の手がかりとして、資料の主題を表現し

た統制語²⁶である。

ここで、吉原町名主竹島仁左衛門が記した「洞房古鑑」²⁷を見れば、宝暦四（一七五四）年の評判記をめぐってある事件が起きていたことがわかる²⁸。それは、細見では絶対に起こり得ないこともある。その概略を実際の評判記と共に示そう²⁹。

江戸町二丁目遊女屋、家田屋太右衛門の抱えに伊澤という遊女がおり、「なさけうすければ、かつ（筆者註―「り」の誤りか）たものはらうこそきらいなる」という評判が為されている。この評判を記したあと、正月二二日、依田和泉守に遊女屋主人から板元浅草寺本屋吉十郎³⁰、販売所吉原江戸町一丁目日本屋彌七、通油町双紙屋小兵衛に対し、「御願申上」たので、吟味の上、吉十郎と小兵衛は過料三貫文に、彌七は手鎖に処された。『吉原出世鑑』は売れ残っていた一〇〇余冊取り上げられた、という一件である。

これはまさに評判記の機能、「遊女評判」をめぐって起きたものである。細見にそれはないので、明らかな差異が認められる。そして、この『吉原出世鑑』はもう二つ、史料学的にも大事なものを示した。一つは、その形態である。当評判記は会話文体で吉原の穿ちを描いた。これは、のちに洒落本の形態に移るその初発的なものと認識できる。会話文体をとり入れつつも、形態そのものは細見を模しているのである。しかし、細見は横本、この評判記は縦小本であるから、作者自身が細見とのなんらかの差異を認めていたのだろうということは、野間が指摘している³¹。評判記が一般的に終わるとされるのが、翌宝暦五年であるから、この評判記は狭義の意味³²での評判記の終わりを意味するものでもある。もう一つ大事なことは、販売に関して、細見と同様のところで売られていたことである。吉十郎は、鱗形屋細見の売所であった。つまり、細見と評判記は享受の位相を接していたと考えられ、宮本が指摘したような評判記は雲の上、細見は庶民という二項対立の見方は厳しいのではないか。しかし、仮名草子形態の評判記とその「読み方」は異なっただであらう。

ここまで前節も含めていかに細見と評判記が異なり、評判記から細見への連続性が考えられないことを述べてきた。ただし、評判記が細見を真似たように、まったく相関関係がないわけではない。しかし、『吉原出世鑑』の作者が分けたように、当代人にとって二つはなんらかの差異があり、狭義の評判記は洒落本に吸収されていき、細見は細見のなかで変容していくのである。

細見と評判記の見方について、いかなる「当代性」を有していたのかというのが議論の一つになることは間違いない。この考えは中野三敏によってなされた³³。当代性とは、例えば評判記に書かれた遊女評判はまさに今遊女を買おうとする人にとっては、有用であったという特質のことを指す。汎用性が時間的に限定的なものをいう。これは細見と評判記が当時の現実に目を向けられた史料であることをうかがわせる指摘である。これを評判記研究のなかで積極的に取り入れた高木まどかの研究³⁴は目を見張るものがある。

細見にも今後導入していくのが筆者の課題である。

第三章 細見からみえる遊女とその存在事実

前章の最後で、当代性の話をした。無論、細見はその瞬間の吉原をもつとも忠実に著した史料であり、これより正確に表したものはない。その意味では、恣意的に書かれた評判記以上に当代性があったと言って良い。ただし、明治期以降になると当代性はあるのだが、事実性の面で議論する必要がある。まず、江戸期における事実性を簡単に見ていく。

例えば、山東京伝の『江戸春一夜千両』には数多くの吉原遊女がでてくる。さて、以下に黄表紙に出てくる遊女を細見と合わせながら列

挙してみよう。

・松人―松葉屋半左衛門抱えの散茶（「新吉原細見」天明五年春）

・瀬川―同。

・哥姫―同。

・花さん・滝さん・十市さん―扇屋宇右衛門抱えのよびだし散茶。花は、花扇、花人の二人いるが、滝さんはたき川、十市はとをち、と思われ、二人はよびだし散茶であるから、よびだし散茶である花扇と思われる。

・長山さん・雛さん・唐琴さん・千山さん―丁子屋庄蔵抱え遊女。長山（てう山）、千山はよびだし散茶。雛さんは、散茶のひ（飛）な（奈）づるか。唐琴（からこと）は散茶。

・哥菊さん―竹屋さ乃抱えのよびだし散茶。

・菅原さん―鶴屋忠右衛門抱えのよびだし散茶。

・江川さん―え（衣）びや甚兵衛？抱えの散茶。

・甘巻さん―大文字屋市兵衛抱えの散茶。

・象潟さん―大ひ（飛）しや久右衛門抱えの座敷持。

・千町さん―小まつや□□□□抱えの座敷持。

以上より、全て実在の遊女が出てきており、江戸期における事実性は、これを見る限り保たれている。また、これ以外にも自明の論理として細見には「当代性」が意識されただろうから、事実性を担保し得ない細見というのは考えにくい。

一方で、玉屋細見が終わる明治五（一八七二）年以降の細見では、いささか事実性が担保されないものが窺える。

「経済及統計」一四号（明治二三（一八九〇）年二月）³⁵では、

明治一六年…吉原遊女数一二二八人

明治一七年…同一二八一人

明治一八年…同一五七四人

明治一九年…同一七一一人

明治二〇年…同一八二二人

明治二一年…同一〇七二人

という数字が残っている。細見では³⁶

明治一七年…一二四六人（細見の編者…藤田吉右衛門）

明治一八年…五〇八人（長谷川園吉）

明治二〇年…一七五六人（竹内齋次郎）

明治二十二年・九五三人(土田吉五郎)

と、なっている。当初ズレは少なかったが、明治一八、二二年の段階では細見は国に申告された数より半分以上少ないことがわかる。史料がないので、ここからは推論になるが、江戸期細見に人数のズレがなかったのは鱗形屋、玉屋といった遊女屋、あるいは遊廓に精通した葛屋が細見を作成していたため、廓の事情を正確に知ることができた一方、明治期に玉屋が細見を作らなくなったあとでは平民が細見を作るようになっていた。彼らがどれほど吉原に精通していたのかを指し示す史料はないが、ここまでのズレを生んだことを鑑みるに、全体的に把握することができる出版人が、少なくとも明治期半ばにおいていなかったことを指し示す。

だが、一つの可能性としては、細見は「遊女」の数であり、国に申告された数は禿・新造といった、いわば「見習いの遊女」も含めていた可能性はある。ともすれば、吉原の半分は実働しない遊女で埋められていたこととなる。今後の研究を待ちたい。

色川大吉は、同「経済及統計」の資料で遊客数に着目し、明治一六年に約四六万人だった吉原の遊客数は明治二十二年には九五万に上ったが、板橋では遊女数に対する遊客数が多く(年間遊女一人で遊客一〇〇〇〜一五〇〇人)、この数字は正直に申告してしまったのかもしれない(=他の廓は数を減らして申告している)という指摘を行った³⁷。遊客数を減らすことにはいかなる意義があったのだろうか、この点も今後の研究を待ちたい。そして、吉原の九五万の遊客数に対し、細見の九五三人の遊女数は俄かに信じがたいが、細見の数字を信じれば板橋の遊女一人が年間にとる遊客数とほぼ同じである。

以上のことから、明治期の細見の事実性についてはさらなる研究が必要である。

また、明治期には偽物(コピー品)と疑われる細見も存在する。明治二三年三月刊行の細見は、前年八月の細見と同一物であることが、宮

本によって指摘されている³⁸。これは江戸期細見のように独占的な販売人がおらず、細見に様々な人間が関わるようになったことを示す一例とも言える。この宮本の指摘以外にコピーの細見が存在するか定かではないが、細見は詐欺商品として当時扱われていたようである。

本章の最後に本論とはあまり関係ないが、重大なことのため遊廓の繁栄について付言しておく。

宮本は、遊廓が繁栄しているか否かの基準を「遊女の総人数が多ければ、その廓は遊客の嗜好にあつて繁昌していることになり、逆に人数が減少すれば衰退したものと解釈することができる」³⁹とした。しかし、この遊廓の盛衰の定義そのものも見直す必要がある。なぜなら、私娼の流入によって爆発的に遊女が増えることがあるからである。特に江戸期では数百の単位で増えた年もある。

筆者は遊廓の盛衰の定義を次に定める。遊女の総人数のみならず、位の高い遊女の割合(太夫、格子／散茶／よびだし散茶／一等芸妓⁴⁰)がある程度占めていること。ある程度というのは、今後あらゆる年の細見を比較することで設定されていく。

総人数だけで見ってしまうと、混乱を極めた幕末の吉原は四〇〇〇もの遊女がおり、それは一八世紀の、まさに六美人とまで謳われた太夫六人が存在した総人数約三〇〇〇人の享保初年の吉原より栄えていることになる。その後、宝暦一一年の高尾太夫を最後に太夫、格子は滅び⁴⁰、時同じくして尾張屋清十郎の揚屋も滅び、揚屋は廃絶する時代を迎えることから転落の吉原になっていったという通説をその判断のみで覆すことになる。以上のことから宮本の定義の見直しを含め、慎重に検討すべきである。

おわりに

本稿では、細見の定義を、やや論がまとまらないままであったが、評判記との差異に気を付けながら行い、第二章では「当代性」が意識された細見の明治期における不可解な人数に対し、その事実性の疑義を呈した。

江戸期に関して、黄表紙一つで検討したのは、『江戸春一夜千両』が京伝のなかでも比較的多くの遊女が出てくるということ、京伝は吉原に若くして馴染み、妻も吉原の遊女であり、細見を出版する蔦屋と深い関係にあったということ、そしてなにより他に比較史料が評判記しかなく、都合悪く、細見的な評判記がある時代に細見が(当時はあったが)現存していないという運の悪さのためである。

明治期の細見の事実性を確かめる上でもっとも困難なことは、管見の限り、明治五年に芸娼妓の名簿が存在する(東京都公文書館蔵)が、それ以降ないことである。明治五年のみ存在するということは、芸娼妓解放令によって遊女の多くが廓を立ち去ったため、今いる遊女を把握しようとして限定的に作成されたのではないかと思われる。そのため、細見の事実性をめぐる問題は別の史料からも考える必要があるが、それをなす史料は管見の限りない。

史料上の制約が多い吉原の研究において、筆者も宮本の研究も推論を多く含むことは、課題である。本稿でも宮本の研究に対し、批判するところが多かった。しかし、一九七〇年代に歴史学では誰もなさなかつた細見への視角を生んだという事実が消えず、その研究の開拓者としてその名を残すであろう。

実証主義と相容れず、時には文学研究とも取られがちな評判記と細見について、研究をするのは、筆者もその一人だが、近年高木まどかを中心に存在する。高木まどかの問題点は、遊女評判記については詳細な論考も多く、労作だが、細見の扱いが非常に曖昧であるというこ

とにある。ところどころで、評判記は洒落本や細見に変容・吸収されていったというが、細見に評判記のなにが吸収されたのか不詳である。筆者は、本稿に記した通り、細見と評判記に相関関係は認めながらも、直接的な連続性は認めていない。一方、評判記が宝暦五年に終わるという悪しき文学史に対し、高木は単に受け入れるわけではなく、内容面から見れば存続していたという先行研究を踏まえた指摘は、評判記と洒落本の関係性を考える上で、今後文学史のスタンダードになり得る指摘・まとめ方である。

評判記も細見も同じく吉原の当代性を如実に現したものであり、だからこそ両者をより綿密に検討していくことが必要なのである。評判記も細見もその他の史料と比較検討することが難しく、いかに実証主義歴史学のなかで生き抜くのが、この研究全体の課題でもあるかもしれない。そのなかで、出版統制をめぐる問題に注目したい。高木は既に注目しており、その論考を二〇一九年に著している⁴¹。細見の場合には加えて、隠売女、隠遊女の取締に注目したい。彼女らがどういう位で吉原に流入したのか細見から探るのは源氏名であるから至難の業であるが、今後の課題としたい。

最後に、板本の冊子について触れておきたい。中野三敏が非常に面白い論考を残したが、歴史学で活用されているものは未だ見ない。以下、中野の論考⁴²を要約する形で紹介しよう。

江戸時代の書物には明らかな身分があり、それを端的に表すのが外型であった。大本は江戸時代初期に見られる。これは、本が貴顕の専有物であったからであり、時代が下ると書型そのものの地位や経済を考え大衆化していく。この初期段階でも品位が低いものは小型で出版された。遊女評判記はその一例である。初期遊女評判記は、後期の洒落本と見間違うようなもので出版されていた。つまり、初発的細見は大型であったから、中野の論に従えば貴顕のものが吉原にいったが、遊女評判記が小型だということは、その読み手は実は初期段階におい

て一般的な民衆であつたことがうかがえる。

以上のような論考は、石井良助の遊客の考察などと合わせて今後検討されていくのを期したい。

参考文献

- 赤坂治績『江戸の芸者―近代女優の原像―』（集英社新書、二〇二二）
- 石井良助『吉原―江戸の遊廓の実態―』（中公新書、一九六七）
- 色川大吉『日本の歴史二一 近代国家の出發』（中央公論新社、二〇〇六）（文庫版初出、一九七四）
- 江戸吉原叢刊行会編『江戸吉原叢刊』第一卷（八木書店、二〇一〇）
- 江戸吉原叢刊行会編『江戸吉原叢刊』第五卷（八木書店、二〇一一）
- 倉金宙本「活動の記録 近世遊廓としての吉原の終焉―「吉原細見」の分析を中心に―」『総合女性史研究』四〇号（総合女性史学会、二〇一三）
- 鈴木俊幸『近世文学研究叢書九 蔦屋重三郎』（若草書房、一九九八）
- 高木まどか「遊女評判記の書き手と読み手―延宝期前後の吉原物を主として―」『常民文化』四二号（二〇一九）
- 高木まどか『近世の遊廓と客―遊女評判記にみる作法と慣習―』（吉川弘文館、二〇二二）
- 滝川政次郎『吉原の四季―清元「北洲千歳寿」考証―』（青蛙房、二〇一四）（初出、一九七二）
- 遅塚忠躬『史学概論』（東京大学出版会、二〇一〇）
- 中野三敏『江戸名物評判記案内』（岩波新書、一九八五）
- 中野三敏『書誌学講義 江戸の板本』（岩波書店、二〇一五）（初出、一九九五）
- 西山松之助『江戸文化誌』（岩波書店、二〇〇六）（初出、一九八七）
- 丹羽謙治「史料としての吉原細見」『江戸文学』一六（一九九六）

- 丹羽謙治 「天理図書館蔵遊女評判記・細見目録稿」 上下(『ビブリア』一〇六、一〇九号(一九九六、一九九八))
- 野間光辰編 『随筆百花苑 花街編』 一二卷(中央公論社、一九八四)
- 花咲一男編 『明和後期吉原細見四種』(近世風俗研究会、一九七六)
- 花咲一男 『江戸吉原図絵』(三樹書房、一九七六)
- 堀口茉純 『吉原はスゴイ―江戸文化を育んだ魅惑の遊郭―』(PHP新書、二〇一八)
- 前田勇編 『江戸語の辞典』(講談社、一九七九)
- 宮本(山城)由紀子 「吉原細見」の研究―元禄から寛政期まで― 『駒沢史学』二四(一九七七)
- 宮本由紀子 「明治期の吉原―「吉原細見」の分析を通して―」 『駒沢史学』三四(一九八六)
- 宮本由紀子 「遊女評判記」について―「吉原細見」以前― 『地方史研究』四二(一九九二)
- 八木 敬一・丹羽 謙治編 『日本書誌学大系七二 吉原細見年表』(青裳堂書店、一九九六)
- 横山百合子 『江戸東京の明治維新』(岩波新書、二〇一八)
- 横山百合子 「遊女の終焉へ」(高埜利彦編『近世史講義―女性の力を問いなおす―』(筑摩新書、二〇二〇))
-
- 1 高木まどか 『近世の遊廓と客―遊女評判記にみる作法と慣習―』(吉川弘文館、二〇二二)。
- 2 宮本由紀子 「遊女評判記」について―「吉原細見」以前― 『地方史研究』四二(一九九二)。
- 3 宮本(山城)由紀子 「吉原細見」の研究―元禄から寛政期まで― 『駒沢史学』二四(一九七七)、宮本由紀子 「明治期の吉原―「吉原細見」の分析を通して―」 『駒沢史学』三四(一九八六)。
- 4 遊女の格を示す印。度々変化した。
- 5 宮本由紀子 「吉原細見」の研究―元禄から寛政期まで― 『駒沢史学』二四(一九七七)。
- 6 遅塚忠躬 『史学概論』(東京大学出版会、二〇一〇)。
- 7 江戸期の風俗研究家の花咲一男は細見について、「(前略)これが吉原について一番に正確な資料であることに議論の余地はないと考えます(後略)」(花咲一男「まえがき」『江戸吉原図絵』(三樹書房、一九七六)と述べた。
- 8 その膨大な成果は、『日本書誌学大系七二 吉原細見年表』(青裳堂書店、一九九六)に見て取れる。
- 9 その成果は鈴木俊幸 『近世文学研究叢書九 葛屋重三郎』(若草書房、一九九八)にある。
- 10 丹羽謙治 「史料としての吉原細見」『江戸文学』一六(一九九六)、一〇四頁。
- 11 江戸語とは、江戸時代に使用されていた語ではなく、江戸という都市の住民が日常的に使用していた語を指す(松村明「序」(前田勇編『江戸語の辞典』(講談社、一九七九))。

- 12 本書は前田勇の没後、その遺稿をもとに編集・刊行されたものである。
- 13 宮本由紀子「細見」『国史大辞典』。
- 14 赤坂治績『江戸の芸者―近代女優の原像―』（集英社新書、二〇一三）、一四四頁。
- 15 石井良助『吉原―江戸の遊廓の実態―』（中公新書、一九六七）、V頁。
- 16 石井の『吉原―江戸の遊廓の実態―』（中公新書、一九六七）の刊行の影響は大きかったらしく、「官立大学の現職の教授助教が（筆者註）助教は西山松之助）、吉原、廓と銘打った書を公刊するということは、曾って無かったことであって、（中略）時勢の転換に驚倒せらるるに相違ない。（中略）学術的には相当高く評価されるべきであろうと思う（後略）」（滝川政次郎『吉原の四季―清元―北洲千歳考証―』（青蛙房、二〇一四）、三三三―三五頁）と称された。が、近年の吉原研究の研究史はこの石井のものを新書であるからか、そもそも触れていないものが多い。一九六〇年代に吉原の概略を緻密な史料解釈と未活用史料であった「徳川制度」を吉原研究に活用したこと、「新吉原規定証文」も学術的におそらく初めて使用し、その後の吉原研究の基礎を築いたこと、これ以降概説的な吉原は描かれず、今なお吉原の全体像を知る上での最も基本的な書であることは間違いない。滝川は、石井に小冊子ではなく吉原についてもっと語ってほしいとの願望を述べるなど、評価の高さがうかがえる。
- 17 この理由が、玉屋山三郎の死亡（生没年不詳）にあるのか、芸娼妓解放令にあるのか、他にあるのか不明。横山百合子は、芸娼妓解放令と決めつけている（横山百合子『江戸東京の明治維新』（岩波新書、二〇一八）、同「遊女の終焉へ」（高埜利彦編『近世史講義―女性の力を問いなおす―』（筑摩新書、二〇二〇）など）が、それを裏付けるものは存在しない。
- 18 『吉原丸鑑』巻六（江戸吉原叢刊刊行会編『江戸吉原叢刊』第五卷（八木書店、二〇一一）、二七七頁。
- 19 江戸吉原叢刊刊行会編『江戸吉原叢刊』第一卷（八木書店、二〇一〇）。
- 20 宮本由紀子「吉原細見」の研究―元禄から寛政期まで―『駒沢史学』二四（一九七七）、一一五頁。
- 21 宮本由紀子「吉原細見」の研究―元禄から寛政期まで―『駒沢史学』二四（一九七七）。
- 22 高木まどか『近世の遊廓と客―遊女評判記にみる作法と慣習―』（吉川弘文館、二〇二一）。
- 23 実際の享保一二年細見をみたわけではなく、随筆からの参照による。
- 24 宮本由紀子「吉原細見」の研究―元禄から寛政期まで―『駒沢史学』二四（一九七七）。
- 25 「美名の川」（花咲一男編『明和後期吉原細見四種』（近世風俗研究会、一九七六）。
- 26 「国立国会図書館件名標目表（NDLSH）」（<https://www.ndl.go.jp/data/catstandards/classification/subject/index.html>）最終閲覧二〇一三年七月二日。
- 27 竹島仁左衛門「洞房古鑑」（野間光辰編『随筆百花苑 花街編』二二卷（中央公論社、一九八四））。全八巻ある。
- 28 江戸吉原叢刊刊行会編『江戸吉原叢刊』第五卷（八木書店、二〇一一）の「解題」で、「随筆吉原細見（一）」「今昔」第二巻第九号（一九三一）に本論と同じと思われる事件について、あったとされるが典拠不明、としていた。「随筆吉原細見（一）」は「洞房古鑑」から採ったのだろう。
- 29 以下の概略は、「洞房古鑑」巻之四と実際の伊澤（いさわ）の評判が載っている『吉原出世鑑』（江戸吉原叢刊刊行会編『江戸吉原叢刊』第五卷（八木書店、二〇一一）より）。
- 30 「洞房古鑑」巻之四では木屋だが、木屋の誤り。
- 31 野間光辰「解題」（江戸吉原叢刊刊行会編『江戸吉原叢刊』第五卷（八木書店、二〇一一））。
- 32 洒落本に移したあとも評判記はあるが、一般的に洒落本になる前を評判記とする場合が多い。
- 33 中野三敏『江戸名物評判記案内』（岩波新書、一九八五）。
- 34 高木まどか「遊女評判記の書き手と読み手―延宝期前後の吉原物を主として―」（『常民文化』四二号（二〇一九））。

- 『経済及統計 一四』（経済統計社、一八九〇）。国立国会図書館では刊行年不詳のため、色川大吉『日本の歴史二一 近代国家の出發』（中央公論新社、二〇〇六）を参照した。
- 35 官本由紀子「明治期の吉原―「吉原細見」の分析を通して―」『駒沢史学』三四（一九八六）。
- 36 色川大吉『日本の歴史二一 近代国家の出發』（中央公論新社、二〇〇六）（文庫版初出、一九七四）。
- 37 官本由紀子「明治期の吉原―「吉原細見」の分析を通して―」『駒沢史学』三四（一九八六）。
- 38 官本由紀子「明治期の吉原―「吉原細見」の分析を通して―」『駒沢史学』三四（一九八六）、一八三頁。
- 39 これまで宝暦二年の花紫が最後の太夫であるとされてきた（西山松之助『江戸文化誌』（岩波書店、二〇〇六）（初出、一九八七）、堀口菜純『吉原はスゴイ―江戸文化を育んだ魅惑の遊郭―』（Pp.新書、二〇一八）など）。しかし、評判記と細見を見ればそれは誤りであり、花紫は宝暦五年ほどにいたなくなるが、その後小紫、高尾といった太夫が存在することがわかった（拙稿「活動の記録 近世遊廓としての吉原の終焉―「吉原細見」の分析を中心に―」『総合女性史研究』四〇号（総合女性史学会、二〇二二））。
- 40 高木まどか「遊女評判記の書き手と読み手―延宝期前後の吉原物を主として―」『常民文化』四二号（二〇一九）。
- 41 中野三敏『書誌学講義 江戸の板本』（岩波書店、二〇一五）（初出、一九九五）。